

不登校傾向の男子中学生への教育相談的介入について

―スクールカウンセラーによる母親への支援を中心に―

鈴木里佳・岩瀧大樹

群馬大学教育実践研究 別刷
第36号 297～306頁 2019

群馬大学教育学部 附属学校教育臨床総合センター

不登校傾向の男子中学生への教育相談的介入について —スクールカウンセラーによる母親への支援を中心に—

鈴木 里佳¹⁾・岩瀧 大樹²⁾

1) 群馬県スクールカウンセラー

2) 群馬大学教育学部附属学校教育臨床総合センター

A Case Study for a Junior High School Boy with Tendency toward School Non-Attendance —Focused on supporting his mother in School Counseling—

Rika SUZUKI¹⁾, Daiju IWATAKI²⁾

1) Gunma Prefecture Public School Counselor

2) Center for Cooperative Research and Development on School Education
Faculty of Education, Gunma University

キーワード：中学生、学校教育相談、不登校、コンサルテーション

Keywords : Junior High School Student, School Counseling, Nonattendance, School Consultation

(2018年10月31日受理)

〔はじめに〕

近年、文部科学省によるいじめ問題対策強化なども踏まえ、スクールカウンセラー（以下SC）の全公立学校への配置が大規模に進められ、学校現場における教育相談、スクールカウンセリングの充実が図られている。主なSCの活動として、児童生徒や保護者を対象としたカウンセリング、カウンセリングの専門職として教員と関わるコンサルテーション、様々な問題のアセスメントなどがあげられる。もちろん、学校や地域に不慮のアクシデントや予期せぬハプニングが発生した際には、集中的な危機介入も重要な任務となる。特に、災害や事故などに関しては、山本（2014）や日野（2015）などによりマニュアル等も整えられつつあり、SCによる介入の必要性をうかがい知ることができる。また、いじめや不登校などに対する問題解決的な介入だけではなく、コミュニケーションスキルやメ

ンタルヘルスに焦点を当てた、スクールカウンセラーによる予防的・開発的な介入や心理教育に関する実践も少しずつ蓄積されつつある（岩瀧，2008；岩瀧，2009；有田・岩瀧，2018など）。

しかし、多様な役割があげられてはいるものの、児童生徒への相談はSCの基本的な業務である。近年の傾向を概観してみても、いじめや不登校などの学校不適応問題へのSCによる児童生徒への相談業務が検討されており、本田（2010）や小山（2015）のような実践事例が積み重ねられつつある。

一方で、SCの勤務形態は1～2週間に1日というものが多く、様々な文脈により対象となる児童生徒と会えなかったり、関われなかったりする場合も十分に想定される。あくまでも学校教育相談における主たる援助者は教員となってくるのが現実である。そのため、当該の問題を抱える児童生徒の関係者（教員、SCなど各々の専門家）によるコンサルテーションが

果たす役割は、問題解決に向け、極めて重要なものとなる。さらに、問題解決においては、児童生徒の保護者との連携も不可欠なものであり、保護者の支援もSCに期待される活動となっている。先行研究としては、吉田（2017）や山口（2018）などにより、SCによる保護者への支援を通して、不登校などの問題を抱えている児童生徒への援助が検討されている。しかし、更なる検討の構築が必要とされる状況であり、改めてSCによる保護者支援を見直すことには、大きな意義があると判断できる。

本事例では、SCによる保護者（母親）への支援を中核とし、当該の生徒が抱える登校に関する問題について振り返り、考察する。なお事例に関しては、プライバシーを保護すべく、個人の特定を避ける変更をした。文中における会話の部分で、〈 〉はSC、「 」は対象の発言を示す。

〔事例の概要〕

1. 対 象

A（中学校2年生男子）。色白でやや細身。

2. 家族と生育歴

父親（会社員）、母親（自営業）、姉（高等学校2年生）、A、弟（小学校1年生）の5人家族。Aは穏やかかつ真面目で友人とのトラブルもなく、性格が反対の活発な姉を慕っていた。仕事で忙しかった母親に代わり、弟の世話も積極的に行っていた。小学生の頃から、朝起きるのが苦手であり、母親が何度も声をかけないと起きられずにいた。

父親は、仕事の関係で帰宅が夜遅くなることが多く、Aとは朝に顔を合わす程度であったが、登校の支度で慌ただしいAに不満をもち、その都度、注意をしていた。しかし、忙しくもPTAの役員を引き受けたり、Aたちの学校行事には参加したりしていた。家族に対しては厳しく、外では真面目で、堅実な良い父親像として見られている。特にAを長男として意識し、厳しくしつけていた。

母親は弟の出産後、父親の手を借りつつ自営で朝から晩まで忙しく働いていた。しかし、父親の手助けに感謝をしているものの、父親の自己中心的で、周囲のことを考えず、マイペースで進めるやり方に少々不満

を抱いていた。

姉および弟は、現在のところ各々のペースで各自の学校生活を送っている。

3. 主訴および来談の経緯

X年5月下旬、SCとして配置されていた第一筆者が、Aの学年主任（50代男性）および学級担任（50代女性）より、Aへの対応に関する相談を受ける。1年生時の学級担任（30代男性・Aの部活動顧問）は、他学年の担当となっていた。

中学校入学から翌年の1月までは、遅刻・欠席もなく順調に登校していたが、2月後半より腹痛や頭痛を訴え、遅刻や早退を繰り返すようになった。3月には卒業式とその前後に出席ができたものの、その他は欠席となる。春休み中、部活動の練習には参加することはできなかった。しかし部活動顧問の働きかけにより、部活動の仲間5人で申し込んであった、この時期に実施された地区の駅伝に向けての練習およびその大会には参加することができた。

新学期を迎え、始業式に上記学年主任と学級担任が家庭訪問を実施し、Aと話をする機会を設けた。すると翌日、学校へ母親からの電話連絡があった。当該の夜にAが家庭で暴れたとの内容であった。そしてその中で、①しばらく家庭訪問は控えてほしい、②配布物を友人経由で入手したい、③連絡は母親の携帯電話にもらいたい、という3つの依頼が伝えられた。その後、4月から7月下旬まで、Aの登校しない状態が続いていた。

そのため、学校からSCに対し、AおよびAの母親に対する支援が期待されるようになった。以上のことから、本ケースにおいてはSCが継続的に関わるとともに、母親の支援を中核にとらえ、教員とのコンサルテーションを実施しつつ、進めていくことが最適と判断した。

4. 面接方法

公立中学校カウンセリングルームでの面談を設定。時間に関しては、母親の仕事のスケジュールを優先することとした。そのため、最初の2回はSCの勤務時間外となったが、3回目以降は、母親の仕事の合間での来室が可能となり、午後からの45分を基本としたオンデマンド方式で進めることとした。

5. アセスメント

① 小学校教員からの情報

小学校6年生時の学級担任からは、おとなしい面があげられたものの、自分の意見もきちんと言うことができ、仲の良い友人も数名いて、いじめられるようなことはなかったとの情報提供があった。

② 中学校教員からの情報

部活動顧問でもある1年生時の学級担任からは、学習面では中位くらいであること、口数は多くはないが孤立している様子は見られないこと、部活動にも真面目に取り組んでいることなどが話された。

③ 母親からの情報

Aに関しては、母親の仕事が忙しく、家を空けることも多かったが、きょうだい3人で仲良く留守番をして食事の用意もしてくれるような、手伝いのできる優しい子だととらえている。

また、Aの問題以上に自身と父親との関係を問題視している。父親のことを、「自分の言いたいことしか言わず、相手の気持ちを考えられない人だ」と認識している。特にAへの対応について、不満を抱いている様子がうかがえた。

6. SCによる援助計画

① Aへのサポート

母親を通して、家で過ごす方にいくつかの目標を設定した。具体的には、昼夜逆転にならぬよう生活リズムを維持すべく、「食事を家族で食べること」「お手伝いをする事」を提案した。また、「土日などは、友人と遊んだりして適度な運動をするように」と促した。

② 教員へのサポート

学級担任とSCでAへのサポートチームを作成し、母親面談後のコンサルテーションを適宜実施するとともに、Aの登校に向けた学校内の環境調整、その他のサポーター（教員など）への支援を行うこととした。

③ 母親へのサポート

Aの不登校・自身の仕事・夫婦間の問題等、母親の抱えている現状に対し、受容的に関わることをベースとした。そして、母親をサポートするプロセスで、母親自身の問題のとらえ方や価値観などの認知、それに伴う感情を明らかにしつつ、SCとの協働により問題解決を目指すこととした。特に深い問題となっている、一人で多くの役割を担っている部分を労うことも

に、Aに対する理解の幅を広げ、共に考えていくスタンスを重視することとした。

〔介入経過〕

第1期：X年4月～6月

#1～#4 ラポールの構築と語られる思い

母親より、Aが学校に行かなくなったため、心因的な問題を考慮し、地域のメンタルクリニックへの受診を勧めたことが語られた。しかし、Aが「自分自身の問題だから行かない」と返答したため、今後、どのようにしたらよいのか分からなくなっている、とのことであった。また母親は、父親がAに対し幼少期の頃から厳しく接していたため、Aが言いたいとも言えず、我慢を重ねていることが不登校に関係しているのとらえていた。さらに、自身もAの父親たる夫との関係で理不尽な思いをしながら、結婚以来ずっと耐えてきたことを語った。#1および#2では、Aの話題以上に、夫婦間の問題が面談の中心となっていた。

#3では、「Aが友だちと出かけたり、遊んだりすることもなくなってしまった」と語り、Aの話題に面接時間の大半を費やしていた。SCは傾聴するとともに、家庭内におけるAの活動量の低下が懸念されたため、家庭でも時間などのメリハリのある生活を意識してくこと、そのために積極的な手伝いを投げかけていくこと、手伝いをしたAに対してポジティブにフィードバックすることで自己有用感を培っていくこと、などを提案した。

#4の時期は学校行事（校外学習）が実施されたが、Aは参加することができず、この回の中心的なアジェンダとなっていた。母親はそのことに落胆するとともに、Aが学校行事に参加できるべく、前日に数名の友人が来訪したことを語った。しかし、その際に父親がAに対し、「学校行事への参加や登校に圧力をかけた」と話し、そこから話題は父親への批判に移行していた。また、この回では、前回SCが提案した内容に関して母親から、「起きる時間はお昼近くになっていますが、食器の片付けや風呂洗いを進んでしてくれています。私に気を遣っているのかもしれませんが」との内容が話された。

Aの不登校、夫婦のコミュニケーションなど、複数の問題を抱えながら来談した母親であったが、このころからは他の問題に関して語りつつも、SCとAの不

登校の問題のクリアに目を向けることが可能であった。

《学校コンサルテーション》

① 学級担任との情報交換

当分の間、学級担任などの家庭訪問を見合わせ、配布物はAと同じ部活の生徒に依頼して届けること、電話連絡は母親の携帯電話にすることなど、Aに関し、新学期時の母親からの依頼を尊重する対応が確認された。また、Aと学校との関係を皆無にしてしまうのではなく、Aには友人や配布物、母親にはSCの関わりと適宜学級担任による電話でのコンタクトを継続する方針も改めて話し合われた。なお、学級担任より、母親から「急いで登校させようとは考えていない」という話が伝えられたとの情報提供があった。

② コンサルテーションでのコンセンサス

ほぼ毎日、友人の協力によりAに配布物が届けられているが、Aが直接受け取っていることに着目し、この部分の維持・持続を提案していった。それに伴い、協力者である生徒の過重負担にならぬよう、依頼する回数やタイミング、教員からの感謝を伝えていくことなども確認していった。

第2期：X年7月

#5 Aの理解に目を向ける母親

この回は、配布物を届けてくれたり、遊びに来たりする友人が固定していることを最初に語り、「Aがおとなしく、言いたいこともなかなか言えないため、みんなのイライラのはけ口になっているように思う」という心配を吐露した。さらに、「以前は言うこととやることが全く違う父親の影響かと考えていましたが、それだけではなく、友だちも関係しているのではないのでしょうか」と続けた。そこで、そのような思いに至った経緯をSCが尋ねてみると、「でも具体的に意地悪されているという様子は見ていないですね」と返答し、「あの子たち（Aの友人）が来てくれていることを、Aは嫌がっていませんよね」と続けた。そして、「理由を誰かに向けようとしていましたね」と語った。また、この回は1学期最後の面談であったため、夏季休業中の過ごし方に関してもアジェンダとして触れていった。SCと母親で、ある程度固定された友人たちの関わりが、ネガティブなものではないこと、この関わりをできるだけ維持していくことが確認され

た。そのため、A宅での関わりだけではなく、Aが友人たちと出かけたり、遊びに行ったりする機会があれば、積極的にサポートしていくことを話し合った。また、2学期のスタート時のシミュレーションも母親とともに検討し、もし登校できない状態が続くようだったら、SCがAに関わることも視野に入れることとした。

《学校コンサルテーション》

① 学級担任との情報交換

数名の生徒に数日おきに配布物をAに届ける依頼をしていること、その生徒たちはAとある程度話をしていくことが報告された。家に上がり、ゲームをすることもあるとのことであった。

② コンサルテーションでのコンセンサス

夏季休業中は勤務制約上SCの対応が難しいため、母親やAからの急な相談等の問い合わせに関しては、学級担任が対応することが確認された。

第3期：X年12月～X+1年2月

#6～#9 Aに対する母親の気持ち

体育祭や合唱コンクールの練習からスタートする2学期になると、Aは遅刻しながらもそれらに参加し、登校できるようになっていた。母親からのSCへの相談の依頼はなかったが、Aが特に問題なく登校できていたこと、母親の仕事が繁忙期を迎えていたことなどから総合的に判断し、Aおよび母親がある程度適応を保っていたものととらえていた。

しかし、12月の期末テスト終了後、Aが2日連続で欠席をすると、母親より面談の依頼が寄せられた。約5か月ぶりの面談となった。ここでは、毎朝Aを起こしているが、全く起きようとしないうAへのいら立ちが語られるとともに、「小学校の頃から寝起きが悪い子で。なので病院で受診したほうがいいんじゃないかと思うこともあるんですが、Aがどうしても嫌がるので強くは言えないんです」という思いが話された。その一方で、10月に実施された三者面談の話題に触れ、「Aが高校に行きたい、とはっきり言ったのでびっくりしました」と話しながら、学習面での遅れが気になっていることもSCに伝えた。

また、#7では、相当いら立っている様子で来室するとともに、この日の午前中は仕事の関係でAよりも先に家を出る必要があったため、定刻にはAを起こし

たが、Aが起きたかは分からないこと、ここ数日は正午過ぎに起床してくることが多く、その度に母親が自動車で学校まで送り届けている様子が投げやりに語られた。SCは、遅刻は増加しているかもしれないが欠席は1学期と比較して少なくなっていること、午後からでも母親のサポートにより登校ができていて、などを示唆していった。同時に、学級担任からの情報提供であった学校でのAの頑張り（放課後に補習授業を受けたり、冬休みの宿題に取り組んだりしていること）を伝えた。SCの言葉を受け、母親は「勉強の遅れを一番心配していたんですが、学校では何とかやっているんですね」と話し、学級担任への感謝の言葉とともに、今後の継続の依頼が語られた。なかなか遅刻せずに登校できるという状態には遠いAへのいら立ちがある反面、Aが学校にて前向きに学んでいることを聞き、安堵した様子も感じられた。

しかし、#8では、前回と同様に相当いら立った様子で来室した。開口一番、「今週は2日も休んでしまったんです。毎朝、何度も起こしているんですが、Aはびくりとも動かないんです。これは病気ですよ。でも土日にお友だちから電話がかかってくるとすぐ起きるんですよ」とSCに伝えてきた。ここでは、医療機関への受診が不可欠だととらえている様子がかがえた。SCは母親のAへの支援を労うとともに、部活動顧問から得た、Aが放課後に学習に取り組んだ後、部活動にも参加しているという情報を伝えた。すると母親は、「部活に行ってるなんて知りませんでした。そういう大事なことも言わないんですよ」と話し、複雑な表情を見せた。なお、この時期は毎回「Aを一度受診させたい」との強い希望が伝えられた。

Aとの面談 #1

遅刻してきたAに声をかけ、カウンセリングルームでの話を提案すると快諾してきた。Aに起床に関することを尋ねると「11時に布団に入るんだけど、すぐに寝付けないんです。でも、寝てしまうと目覚ましかけても起きられません。目覚まし、意味ないです」と答えた。〈何か気になることある？〉と尋ねたが、反応はなかった。そこで、〈苦しかったり、辛かったりすることがあったら、いつでも言ってね〉と伝えると、黙って小さく頷いていた。

引き続き、学習の話題にシフトしていくと、英語や

数学の遅れを心配していること、できれば「塾とかじゃなくて、家で自分のペースでタブレットでやりたい」と通信教育を希望していることを語っていた。

上記のAとの面談後、母親と#9の面談を行った。その中でもAが通信教育を希望していることが話題となったが、母親は「前もAがそんなことを言ったので、高いお金を払ってやったことがあったんです。でも、何回かしかやらなかったんですよ。信用できません」とやや不満そうに語気を強めて話した。また、Aとの朝のやり取りに関して、「朝は15分おきに起こしているのに起きないんです。11時ごろにやっと反応して、そこから黙って出ていきました。何時に学校に行ったのかは私は分かりません」と語った後、急に様々な感情が込み上げてきたらしく、「学校に行かないのはAなのに、なんで私がここまでやらなくちゃならないのでしょうか。父親は何もしていないのに」、「(Aが)不登校になったのは、母親のあなたが悪いって言う人もいます」と、泣きながら一気に訴えてきた。SCは母親の感情や思いを受け止め、Aが遅刻をしながらも登校し真摯に学習や部活動に取り組んでいること、高校への進学を真剣に検討していること、その活動を母親が多大なエネルギーで支えていることを伝え、無表情ながらもやや気持ちを落ち着かせてSCの言葉に耳を傾けていた。なお、タブレットに関しては、Aの強い希望が母親に寄せられたため、納得できない部分はありながらも、高校受験に向けて使用を許すとのことであった。

《学校コンサルテーション》

① 学級担任との情報交換

2学期からは月に数日の欠席は散見されるが、遅刻しながらも4校時の途中からは登校し、教室で学習に取り組んでいる様子などが話された。登校した際には遅刻の注意ではなく、登校を労うとともに、ややユーモアも交えて「3時間目くらいにこられるといいんだけどなあ」などのコミュニケーションを図っているとのことであった。また、学校行事の当日には、遅刻ではあるものの、通常より早目に登校できることが伝えられた。A自身が、周囲の様子や状況を判断し、登校できる面のあることがうかがえた。また、学校行事には父親が出席していたとのことであった。

② コンサルテーションでのコンセンサス

Aがタブレットを活用して、家庭学習を充実させている様子をSCが伝え、学校としても、Aが学習している内容に触れながら、課題を出したり、補習授業の内容を検討したりしていきたい、という今後のサポートが提案された。また、母親より医療機関に関する情報提供が求められたため、地域の複数のクリニックを紹介した旨を共有した。

第4期：X+1年3月～7月

#10～#13 信頼関係の再構築

これまで医療機関への受診を拒んできたAであったが、この時期に素直に応じたことが語られた。その結果、医師より脳貧血の傾向が指摘されたものの、服薬や通院の必要はなく、日常生活にも全く支障がないという言葉が聞かれたとのことであった。大きな病気等の影響を懸念していたが、医師の言葉で安心できた、と母親は話した。

また、SCの勤務は年度による1年間の制約があるため、勤務校が異動になる可能性も少なくない。そのため、年度末に近い時期に、その旨を伝え、「年度や担当の先生が変わるとか言ってほしくないです」とやや強い口調で返してきた。SCは母親の努力を労うとともに、Aの昨年度よりも少しずつ良くなっている様子について丁寧に上げていった。

結局、SCの異動はなく、新年度最初の面談では母親から安堵したと伝えられた。しかし、Aの学級担任がまた別の教員（40代女性）になったことには、不服な様子が語られていた。なおこの時期はAの修学旅行が目前であったため、Aが参加できるのか、という不安な様子もうかがわれた。

修学旅行後の面談では、「(修学旅行に)行けることは行けました。行けると思っていました。最近は、(学校行事などには)行けていましたから。(修学旅行)近くでは早起きをしていましたけど、最近は寝る時間も遅くなってきていて、朝起きられなくなってきました」ということが語られた。SCは、母親がAを信頼してサポートを続けていたことを賞賛すると、やや表情が緩んだように見受けられた。

Aとの面談 #2～3

本人より面談希望が寄せられたため、放課後の時間

を設定した。当日、時間になっても姿を見せなかったため、SCが校内を巡回していると、Aは教室で数名の男子生徒と談笑していた。SCに気づくと、思い出したようにその場を切り上げ、カウンセリングルームに向かった。Aからは、「すみません」という言葉が発せられるとともに、起床に関する内容が話された。修学旅行に関しては「(起きられるよう)練習をしていたけど、ダメだったら仕方がないと思っていた」とのことであった。最近は特に土日の部活動のために起きるのがきついと話す。その点を尋ねると、「レギュラーではないので、(部活動に)行っても迷惑をかけるかなと思う」と答えた。SCはその苦しさを受け止め、平日に登校できている点を取り上げて称賛し、〈今の調子をキープしながら、できる範囲で(起きる時間を)少しずつ早めて行こう〉と伝えた。

また、#3では「それほど話したいことはないけれど、お母さんに面談に行くように言われた」と言いながら来室した。面談に行くように強いる母親、話を聞いてくれない父親への不満をやや諦めた口調で語る。しかし、A自身の話題になると、「夏休みは10時には起きるようにしたい」、「(高校の)オープンスクールに行く」などの積極的なアクションにつながる言葉を発していた。SCはA自身のモチベーションを受け止めるとともに、進学したい高等学校を自ら見つけたことなどにフォーカスし、励ましの言葉をかけた。

《学校コンサルテーション》

① 担任教員との情報交換

新たな学級担任は、前年度の学級担任から適度に情報交換を行っているとのことであった。また、放課後の補習授業に関しては、Aのみならず対象の生徒を増やし、さらに学校全体で充実させるとのことであった。

② コンサルテーションでのコンセンサス

母親が、Aに関わる教員が変わることを受け入れるのに、やや時間がかかる点を確認していった。そのため、学校と家庭との電話での連絡については、Aが登校できるか否かよりも、家での様子を聞いたり、学校での様子を伝えたりするなどの、相互の情報共有に重点を置くこととした。

第5期：X+1年9月～10月

#14～#17 母親の視点へのサポート

2学期最初の面談は、母親の仕事が多忙のため、40分遅れの面談となった。Aに関して、夏季休業中は9時くらいに起床して補習授業に通っていたこと、毎朝1時間ほどかけてノートをまとめていたこと、タブレットで通信教育に取り組んでいたことを話した。この時期は、Aが持久走大会や体育祭などの学校行事には参加できるがその後の登校が困難になること、小遣いをカードゲームにつぎ込んで友人たちと興じていることなどの不満が語られた。SCはこの状況の中でも、継続してある程度積極的に学校生活を過ごしていること、Aが同等の立場の仲間との関係を構築していることなど、肯定的な部分に関しても母親が目向けられるように示唆していった。

しかし、家庭でのAとのコミュニケーション不足を感じており、その点がAの頑張りや、うまくやっている部分に目が向けられないような印象を受けた。また、「仕事も家事も、全て自分だけ。仕事を今から人に任せるわけに行かないし。寝不足になりながら、こなしています」といった言葉も発せられ、母親の仕事が相当繁忙期である様子が見受けられた。実際、Aの家庭学習時間が増えていたり、遅刻をせずに登校できたりする面も話されたが、SCがその部分を取り上げると、「自分が起こしているからです。Aが変わったわけではないです」という肯定的なとらえ方が厳しくなっている様子が見られた。SCは母親の仕事や家事への努力を改めて取り上げるとともに、Aの進路選択に向け、母親の適度な支援とAの頑張りをうまくマッチさせていく必要性を伝えていった。

《学校コンサルテーション》

① 担任教員との情報提供

夏季休業中の学校での補習授業はほぼ遅刻せずに出席していたとのことであった。また、オープンスクールに参加して、当該の高校への進学希望が強いものとなり、努力をしていることが話された。しかし、イベントなどのない日は遅刻が多いとのことであった。

② コンサルテーションでのコンセンサス

母親とAとの家庭でのコミュニケーションが少ない点を問題提起していった。電話連絡の際には、母親の心の安定につながるよう、学校行事などの予定を丁寧に伝えていくこと、進路に関する内容などは特に重視することなどが確認された。

第6期：X+1年11月～X+2年2月

#18～#22 ゴールに向けて

Aの入試が近づいた#18は、母親のやや宣言するような「今は、Aのことを一番に考えなければならないと思っています」という言葉から始まった。そして、毎朝Aを起こすことに、ある程度覚悟して取り組んでいく内容が話された。しかし、仕事の繁忙期が予想外に続いていること、業績が思わしくなかったこと、夫を全く頼ることができないこと、などの苦しい胸の内も話された。Aへのサポートの必要性を感じつつも、自身を取り巻く環境の難しさとの関係から、逡巡している思いがうかがえた。SCは母親と現在の問題を整理し、分類して見直す作業を行ったが、そのプロセスにて、母親から「いろいろありますけど、やっぱりA（の受験）が優先ですね」との言葉が聞かれた。

その後の面談では、家庭でも学習をする姿を多く見るようになったことが話された。これまで同様にAは遅刻が多いものの、放課後の補習授業には参加していた。母親も「放課後に勉強を見てもらっていて、それが（家庭学習の）やる気につながっているようです」と語り、Aの努力している面にも目を向けられつつある様子がうかがえた。SCから〈Aくんが前向きになってきたのは、放課後の勉強以外にも何か理由はありますか？〉と尋ねると、「仕事のこともあります。いろいろな考えることがあって、（自分が）家にいる時間が長くなりました」と語った。〈家にいる時間が長くなり、ご自身に何か変わったと感ずることがありますか〉と続けて尋ねると、「何とか私が頑張って、Aが受験できるようにしていきたい、と考えるようになりました」との返答があった。また、冬季休業前の面談では、学校での補習授業や家庭学習での支援に関して、予想を投げかけたところ、母親からは「やっぱり起こす必要はありますね。でもそれは入試まで割り切ってやります」という言葉が聞かれた。

冬季休業明けの面談では、「9時に起きて、10時の補習には行っていました」という、Aが自律的に学びを進めていたことが話された。しかし、3学期の授業が始まるとまた起きられない状況が続いているとのことであった。夏季休業の時との比較について尋ねると、「同じような感じですね。でも、今の方が、何とか（高校に）行けるかも、という感じがします」と語る。また、家庭でAと母親、母親と父親とのコミュニ

ケーションが増えていることにも触れ、入試後の旅行について家族で話したことが伝えられた。その中では、父親に対する肯定的な言葉も発せられた。

なお、この時期は回を重ねるにつれ、母親から力強い言葉が聞かれるようになっていた。「高校生になるまではしっかりと朝に起こす」、「これから本人が変わってくると思う」などのように、同じ“Aを起こす”ことに関しても、伴う認知や感情などが否定的なものではなく、ニュートラルかつ今後に目を向けたものに変容しつつあった。また、Aが早く起きられる日もあること、友人と遊ぶことはあっても遅くならずに戻って受験勉強をしていること、受験勉強がありながらも家事を手伝ったことなども話されるようになり、Aの行動に対する肯定的な言葉が多く聞かれるようになった。なお、仕事に関しては厳しい状況は続いているが、現在はややセーブしていることなどもあげられた。仕事への関わりについても、幅の広いとらえ方をしようとする側面がうかがえた。

2月、第1次の高校入学試験が実施されたが、Aは周囲の友人よりもいち早く合格をすることができた。母親は、「まさか受かるとは思っていませんでした。試験の日は自分で早く起きて受験に行けました。私もこの日は起きられると思っていました」と安心した様子で語っていた。しかし、合格を喜ぶ半面、今後の高校生活での登校や通学などを心配する様子も話された。Aが合格した高校はやや自宅からの距離があるため、家を出る時間も早くなることを懸念していた。

最終回の#22においても喜びや安心を語りながらも、多くの不安が聞かれた。しかし、途中から「(高校生活は)まだなのに、もう心配してますね。これ、尽きませんね」と苦笑する様子が見られた。SCは、今後の見通しをもつことは大切であるとともに、具体的な方略として、進学先での学級担任や養護教諭、SCなどと早い段階でコンタクトを取り、中学校での様子を伝えるとともに、問題が発生しかけたら早期にサポートが受けられるようにしていくことを提案すると、「(入学したら)早めにやります」と答えた。最後に、SCはこれまで母親が継続してAのサポートをやり遂げたことをフィードバックした。その言葉を聴き、母親はSCに感謝と、今後の展望へのモチベーションの高さを伝え、2年半の面談は終結となった。

Aとの面談 #4

校内でAの姿を見かけたため、〈合格おめでとう〉と声をかけると、笑顔を見せた。この段階でも遅刻は見られるが、欠席はしていなかったもので、その点を取り上げると、「もうすぐで(中学校生活が)終わりですから」と答えた。進学先の距離の点の話題になると、「お姉ちゃんから聞いたけど、高校は授業を休むと単位がとれないんですよね。気を付けます」と力強く返答した。最後にSCが進学先でのソーシャルサポートについて情報提供するとともに、〈困りかけたときが大切だよ〉と伝え、数回頷いていた。

《学校コンサルティング》

① 担任教員との情報交換

Aの志望校に関しては、最悪の事態も想定していたため、Aの希望が叶い、教員全体で喜んでいることが話された。合格発表後、遅刻は見られるが、休まずにいることを認め、卒業後のモチベーションにつなげていく方針が伝えられた。

② コンサルテーションでのコンセンサス

放課後の補習授業に取り組んでいることが、母親の気持ちの安定につながっていることを報告した。また、進学先への情報提供が不可欠であることを確認し、配慮やサポーターが必要である旨を、確実に先方に伝える具体的な方法を検討した。

〔考察〕

第1期、母親はAの登校に関わる問題で学校のカウンセリングルームに来室したが、SCの介入がスタートした際には、学校に対する複雑な思いが同時に語られていた。家庭訪問などの学校の対応への不満、学校に対する依頼は、今後どうしたらいいのかという不安と、学校と共に問題解決に視点を向けることにはやや難しい点があったと判断できる。これは、初期面接への取り組みからもうかがえる。当初は、「仕事が忙しい」とのことで、SCの勤務時間外での面接や、予定時間を超過するなどの面が散見された。また、母親の「急いで登校させようとは考えていない」という言葉からも、周囲のサポートに目が向けられていない可能性がうかがえる。しかし、SCが真摯に母親を迎え入れたことにより、次第にその様子は消失していっ

た。同時に、父親に対し、問題の理由づけをしようとしていた側面もうかがえた。面談を重ねるプロセスで、Aの問題のみならず、夫婦間、働くことなどに関しても、多くの苦しさが語られたことにより、母親の「困っている保護者」という像が浮き彫りになってきた。ここでSCが母親の立場に徹底的に寄り添い、面談の話題をAに関してのみならず、父親に関するものについてもSCが傾聴し、受容していったことが、母親とのラポール構築に大きくつながったと推察される。アジェンダの設定も大切ではあるが、まずはクライアントの話したいこと、価値観や感情などを尊重していく大切さを改めて確認することができた。また、やや一方的な母親からの依頼ではあったが、SCのみならず教員も含めて学校全体が、母親の希望を重視し、まずはAを支えていこうとした姿勢も、上記に関わっていたと考えられる。

第2期ではだいぶSCとのラポールも構築され、Aの問題に対し、母親がどこかに原因帰属をしようとしていた強い様子がうかがえた。特に、父親のみならず、Aの友人にもその視点が向かっている面が見られた。しかし、SCとのやり取りで客観的にAと友人との関係を改めてとらえ、見方の幅を広げたプロセスにより、友人を原因とすることは避けられたと推測する。このプロセスがなければ、母親はAの友人サポートを認知できなかった可能性があげられる。

第3期までは約5カ月のタイムラグがあったが、この時期は前述のように、多くの学校行事があり、Aがそれらには積極的な関心を寄せていたためにある程度参加や出席ができていた。第1期では、学校行事に関係なく、Aの不登校は続いていたため、この時期は比較的良好な状態であったと判断できる。ゆえに、母親もAの登校の問題からは一時的に離れていたものにとらえている。しかし2学期の最後のイベントである期末テスト終了後、Aが欠席を重ねると、SCのもとを訪れるようになった。Aに対する不満とともに、この時期はAとのコミュニケーション不足を懸念していた様子がうかがえる。Aがいつ登校しているのかが把握できずにいること、Aが志望校を強い意志で決定していたこと、登校後に部活動や補習授業に積極的に取り組んでいたことなど、Aのことを理解できずにいる苦しい様子がうかがえた。加えて、Aのサポートを献身的に行っているにもかかわらず、Aの態度に変化の見ら

れないこと、周囲からも自身が原因だと非難されたことなどにより、やりきれない思いがこみ上げてきた場面も見られた。SCはここで、母親のこれまでの尽力や思いを受容するとともに、現在のところある程度うまくいっている点、遅刻が多いながらもAが前向きに取り組んでいる点などをとらえて伝えていった。母親からは肯定も否定もなかったが、冷静にSCの言葉に耳を傾けていたことから、現在の状況に対する見方（認知）を広げようとしていたと推察される。

第4期では、Aは遅刻をしつつもほとんど欠席しない、という本人なりのペースを構築していたように感じられた。これまでのSCとのやり取りから、学校行事などの本人にとってポジティブなイベントに関しては、比較的取り組めている様子から、修学旅行に対しては母親もやや楽観的な見方ができていたように感じられた。これまでの面談で、Aのできている部分をSCは適宜示唆していったが、少しずつではあるが奏功していたといえよう。

一方、A自身との面談も2回ほど実施したが、本人がある程度クールに状況をとらえている様子がうかがえた。部活動への参加、父親や母親とのやり取りなどの話題からは、無理をしたり、抗ったりするのではなく、エネルギー消費を最小限に抑えようとしている雰囲気伝わってきた。そして、中学校生活ではなく、高校生活にAの視点が向いており、受験勉強やオープンスクールの見学などのアクションにつながっている様子が感じられた。

第5期は、母親が視点（考え方や価値観）を広げたり、多面的にとらえたりすることが、やや困難な時期であった。Aに関する出来事であっても「できている部分」に目を向けることができず、「できていない部分」へ過度に着眼するのみならず、今後の展望に関しても不安を発生させている様子がうかがえた。仕事の繁忙期と重なっていたこと、夫婦のコミュニケーションも不足していたことなどの影響も推察されるが、「自分だけが」といった過度の一般化のような認知の狭まりがうかがえた。SCとしては、これまでの面談と同様に、この部分を受容しながらも、Aのできている部分への気づきを適度に示唆していったが、母親にとっては、Aの登校渋りのみならず、いくつかの前述したような問題が重なっていたことから、なかなか気づくのが困難な時期であったと判断できる。しかし、

SCの立場から伝えていったことには、ある程度意義のあるものであったととらえている。

その理由が第6期にあげられる。この時期は、Aが本人なりに受験勉強に挑んでいたが、放課後の補習授業や遅刻しながらでの登校が、やる気につながっていると語り、Aの「できている部分」にしっかりと目を向けられるようになっていた。仕事に関しても、Aへのサポートを優先させることで、ある程度割り切ったり、距離を置いたりすることにより、落ち着きを得ていたといえよう。いずれにせよ、母親の考え方や価値観が柔軟に広がった時期であるととらえられる。

〔まとめと今後の課題〕

Aの登校に関するケースであったが、直接Aに関わる以上に、母親への間接的な支援を中核にしていっていった。Aの問題のみならず、自身の夫婦間、仕事での問題なども語られていった。教育相談を主たる軸とするSCの立場ではどこに焦点を向けるべきなのか慎重になる部分もあったが、母親の語りたいこと、「今ここ」で苦しんでいることを取り上げていったことは、ラポール構築のみならず、母親のものの考え方などの広がりにつながったととらえている。主訴を重視しつつも、クライアントの現在の気持ちに寄り添う重要性を振り返る貴重なケースとなった。

また、Aへの支援としては、学校の取り組みにもある程度の有効性を見出すことができた。遅刻しがちなAに対し、「登校している」面に着目し、学校全体で対応していたことは、Aの学校に対する気持ちをつなげていたと推察される。特に放課後に実施されていた補習授業に関しては、学習面での遅れを懸念していたAにとっては、非常に有意義な場であったといえよう。ただ補習授業を実施していただけではなく、Aの遅れている領域や、家庭学習とのリンクが検討されて

いた点は、Aの学習に対するモチベーションの維持に資していたと考えられる。

今回は母親に対し、SCがメインで関わっていったが、今後の課題としては、“母親と学級担任をつなぐ”という視点も取り入れていく必要があるように感じられた。当該の児童生徒の抱える問題に対する、適切な援助チームの作成もSCの任務である。多すぎず、文脈や実態に応じた最適なメンバーでのチーム構築にも、目を向けられるようにしていきたい。

〔引用文献〕

- 有田高枝・岩瀧大樹（2018） スクールカウンセラーによる構成的グループエンカウンターの実践事例―教員と協働したりフレーミングワークを中心に― 日本学校教育相談学会第30回総会・研究大会論文集，35-36.
- 日野宜千（2015） 日本学校教育相談学会研修テキスト「35 危機管理と危機対応」 日本学校教育相談学会
- 本田芳子（2010） ある中学生女子へのスクールカウンセラーとしての関わり 心理相談研究，1，39-49.
- 岩瀧大樹（2008） 中学校入学時の子どもの期待・不安へのソーシャル・スキル・トレーニング効果の検討 学校教育相談研究，18，33-41.
- 岩瀧大樹（2009） アスペルガー症候群の男児への教育相談的介入―プレイセラピーにおけることばとボールを用いたソーシャル・スキル・トレーニングの効果―学校教育相談研究，19，22-31.
- 小山充道（2015） 保育園児に脳外科手術を受けた女子中学生の苦悩と心の成長 藤女子大学QOL研究所紀要，10-1，91-106.
- 文部科学省（2007） 児童生徒の教育相談の充実について―一生き生きとして子どもを育てる相談体制づくり―（報告）
- 山口正寛（2018） 特別支援学校（知的障害）における保護者への心理教育的介入の実践報告 福山市立大学教育学部研究紀要，6，107-113.
- 山本健治（2014） 学校心理臨床における危機介入と緊急支援 教育学論究，6，185-191.
- 吉田絵美（2017） 不登校を繰り返す男子中学生及びその保護者との面接家庭 児童教育学研究，36，295-307.

（すずき りか・いわたき だいじゅ）